歴史地震
第 19 号(2003) 47-51 頁
受付日 2004/1/14, 受理日 2004/2/23

天正地震(1586 年)時の飛騨白川郷 荘川村における大規模山体崩壊について

坂部 和夫*

§1. はじめに

天正十三年十一月二十九日(1586 年 1 月 18 日)に天正地震が起こった. この地震により, 飛騨荘川村の一色付近で大規模山体崩壊があり, 多くの村落の埋没と住民の圧死が知られる.

江戸時代の史料『白川年代記(三島本)』には,「赤崩西洞ノ釜ヵ洞一時ニ突埋ム赤崩二十軒・山田八軒・牧ヶ野六十軒無跡形滅亡ス」と書かれている. これ等の記載を再検討し, その実態を明らかにしたい.

§2. 荘川村の一色付近における大規模山体崩壊の再検討

天正地震時の荘川村の一色付近における大規模山体崩壊について, 次のことを考察・調査した.

2.1 史料の比較検討

はじめに, 天保二年(1831 年)成立の『白川年代記(三島本)』(三島勘左衛門正英著)には, 次のように書かれている.

「十一月廿九日天地震動シテ水沢上村帰雲山一時二崩飛テ此時帰雲城跡形ナク突埋ム(中略)赤崩西洞ノ釜ヵ洞一時二突埋ム赤崩二十軒・山田八軒・牧ヶ野六十軒無跡形滅亡ス」

この文面からは,「赤崩二十軒・山田八軒・牧ヶ野六十軒」が, いずれも大規模山体崩壊(図 1)によって「無跡形滅亡ス」という状態であったと読み取れる.

これに対して, 同じ天保二年(1831 年)成立の『白川年代記(益戸本)』(三島勘左衛門正英著)には,

「十一月廿九日天地震動裂ルカ如ク, 水沢上村, 帰雲ノ城山一時二崩懸り突埋ム. 西洞ノ釜ヵ洞, 赤崩同時二山脱(ヌケ)シテ跡形ナシ. 此時帰雲ノ城地内ヶ島六代ノ舵跡一時二断絶シ, (中略)此時, 水沢上, 赤崩跡形ナク突埋ム. 」と書かれている.

この文面からは,「赤崩」は, 大規模山体崩壊「山脱(ヌケ)シテ跡形ナシ」「跡形ナク突埋ム」という状態であったと読み取れるが,「山田」と「牧ヶ野」については記載がないので, 両者に被害はなかったと読み取れる.

一方,『白川年代記(三島本)』には, 次のように書かれている.

「天文十六年 丁未 白山焼ル」
「天文二十三年甲寅 白山焼出ル」
「弘治元年 乙卯
弘治三年 丁巳 飛州大飢饉牧ヵ野山田退転半減ス」

これに対して,『白川年代記(益戸本)』には,

「天文十六 丁未 加賀ノ白山大焼, 近国へ灰ヲ降シ草木枯失五穀熟ラス. 」
「天文二十三 甲寅 白山再ビ大焼大地震・飢饉疫病
弘治元年 乙卯 大飢饉, 飢渇村里退転, 牧ヶ野
弘治三年 丁巳 山田不残滅亡. 」と書かれている.

また,『長滝寺文書「荘厳講執事帳」』(郡上郡白鳥町長滝 長滝寺所蔵)には,

「干時天文廿三甲寅卯月二日ヨリ白山御前剣山焼出, 地獄五色二湧上ルコトー丈余ナリ, 」と書かれている.

これらの文面からは, 天文十六年(1547 年)と天文二十三年(1554 年)に「加賀ノ白山」噴火による降灰があり, 弘治元年(1555 年)から弘治三年(1557 年)にかけて「大飢饉牧ヶ野山田退転」して, 牧ヶ野と山田はその戸数が「半減ス」または「不残滅亡」という状態であったと読み取れる.

ここで, 享保三年(1718 年)成立の『遊浄寺猿丸村由縁記』(写)(三島太郎左衛門正辰著)(図 2)には, 次のように書かれている.

* 〒445-0075 愛知県西尾市戸ヶ崎 5-2-4

「天文十六年丁未ノ五月ノ末ヨリ加州白山三ッノ嶺頻ニ鳴動シテ地震ノ如ク地火燃発シテ炎中天ニ立登り黒煙四方ニ遍満シテ一天晴ルゝ時ナク日月ノ光モ朧氣ニテ灰ノ降ル事雪ノ如シ　草木モ枯萎ミ五穀果菜サナガラ冬枯ノ如クミノル叟ナシ　万民色ヲ失フ六月ノ季ニ至リ陰火漸ク焼静マリケレドモ餘煙猶殘リテ天気清朗ナラズ

元来白川一郷ハ白山東南ノ麓ニ差続キタル地ナレバ秋二至リ一粒ノ穀モ実法事ナク貧困ノ山人飢餓ノ辛難ヲ凌グ叟アタハズ飢死スル者員限リナシ　翌戊申ノ歳些年立直リテ色ヲ直シケル

夫ヨリ八ヶ年ヲスギテ天文廿三甲寅ノ三月ヨリ二度白山別山ノ絶頂ヨリ焔火天ヲ霞メテ焼起リ加賀越中越前飛騨ノ四ヶ國二灰ヲ降シ諸作生育スル事ナク八月二至テ火焔ハ静ルトイヘドモ原野ニ青草ナク山林ニ青葉ナシ　イカニ況ンヤ民屋ノ生産ニ於テオヤ　食物悉クツキ果テ餓莩街ニ満ツル有様目モ當ラレズ　此時牧ヶ埜村モ家ヲ捨テ妻子ヲタヅサヘテ多クハ他國ヘ離散セリ

然レドモ友定坊並ニ又右衛門ノ輩ハ久年ノ貯有テ木ノ葉草ノ根等取集メテ堪凌ギ日ヲ送リケル

其ノ翌年弘治元乙卯歳押続テ凶作　明ル丙辰ノ秋モ折カサネテ飢饉トナリケレバ今ハ早ヤ飢渇ヲ凌グベキ術計盡テ友走坊モコラヘ兼タリケレバ（中略）其身ハイササカノ所縁有ケレバ濃州粟野ト云フ所ヘ逃奔シテ飢渇ヲ遁ル　同行又右衛門驚キ騒キ師旦ノ契リ深ケレバ跡ヲ慕ヒ妻子ヲ倶シテ共ニ粟野ニハシッテ餓難ヲ免ル　其他与八郎・市藏・市左エ門ノ族追々粟野ニ行テ同行ノ好ヲ忘レズ友定坊ニ奉仕シケル此時牧ヶ野山田ノ貳ヶ邑跡形ナク退轉セリ

狩猟ヲ營ミト仕ケル故幽カニ数軒ヲ殘セリ

弘治三年丁巳ヨリ永祿八年乙丑マデ前後九ヶ年粟野ニ於テ身命ヲ繋ゲリ」

この記載は詳細であり，明確である．この文面からは，天文十六年と天文二十三年に「加州白山」噴火による降灰があり，弘治元年から弘治三年にかけて，「飢饉」「牧ヶ野山田ノ貳ケ邑跡形ナク退轉セリ　狩猟ヲ營ミト仕ケル故幽カニ数軒ヲ殘セリ」という状態であったと読み取れる．

このように，はじめに示した『白川年代記（三島本）』の文面から，「赤崩二十軒・山田八軒・牧ヶ野六十軒」が，いずれも大規模山体崩壊によって「無跡形滅亡ス」という状態であったと読み取ることは間違いであることが分かる．

2.2　被災地と想定される地域の現地調査

史料に記載された被災地と想定される三ヶ所について現地調査をした．

ア，赤崩

現地の慰霊碑（図 3）が建っている位置は，天正地震（1586 年）時の赤崩村落の神社跡と言い伝えられ，その周辺は宮平とも宮跡とも云われている．この慰霊碑に隣接して五輪塔があるが，天正地震時の遺物と言い伝えられている．現在は，一色国際スキー場になっている（図 4）．

なお，慰霊碑の碑文の一部には，「裏山崩壊し一瞬にして二十数戸の部落が全滅し数十名の人命を失ったと言傳へらる」と書かれている．

イ，山田

周辺に崩壊性地形は見られず，大規模山体崩壊と土砂移動の痕跡は全くない．現地には，今でも五輪塔が散在している．現在は，別荘地である．

ウ，牧ヶ野

山田と同じように，周辺に崩壊性地形は見られず，大規模山体崩壊と土砂移動の痕跡は全くない．現在は，別荘地である．ちなみに，文明十三年（1481 年）開基の牧ヶ野道場は，荘川村指定文化財になっており，現存する数十個の礎石群は当時のままである（図 5・6）．敷地内には，五輪塔がある．

2.3　被災地と想定される地域の地元の伝承

天文十六年（1547 年）と天文二十三年（1554 年）の白山大噴火のため一色の山田・牧ヶ野一帯に大降灰があり，特に弘治元年（1555 年）から弘治三年（1557 年）にかけて凶作・大飢饉が続いた．それに加えて，この一帯は一色川沿いに位置するため，霜降の時期が他の村落より早かった．このため，住民は美濃粟野（現岐阜市）に移住した．永禄九年（1566 年）帰郷して東隣の河戸の奥地を切り開いて定住した．そのとき，牧ヶ野道場も牧ヶ野からここに移転し，遊浄寺（現住職牧ヶ野良三氏）として今日に至っている．寺河戸の地名は，これに由来すると云われる〔『荘川村史　上

巻』].

一方，天正地震（1586 年）時には，赤崩だけに大規模山体崩壊と土砂移動があり，二十数戸の村落が全滅し数十名の人命を失った.

§3. おわりに

江戸時代の史料『白川年代記（三島本）』による，天正地震（1586 年）時の飛騨荘川村の一色付近での被害とされている内容は，次の二種類の自然災害を一緒にし，誤り伝えられたことが分かった.

ア，天文十六年（1547 年）と天文二十三年（1554 年）の白山大噴火のため大降灰があり，特に弘治元年（1555 年）から弘治三年（1557 年）にかけての凶作・大飢饉による村落の全面的移転
——— 山田・牧ケ野

イ，天正十三年（1586 年）の天正地震時の大規模山体崩壊と土砂移動による村落の埋没と住民の圧死
——— 赤崩

史料

『白川年代記（三島本）』，三島勘左衛門正英，1831.
『白川年代記（益戸本）』，三島勘左衛門正英，1831.
『長滝寺文書「荘厳講執事帳」』，郡上郡白鳥町　長滝　長滝寺所蔵.
『遊浄寺猿丸村由縁記』（写），三島太郎左衛門正辰，1718.
『荘川村史　上巻』，荘川村史編集委員会，1975，荘川村史編集室，400-402.

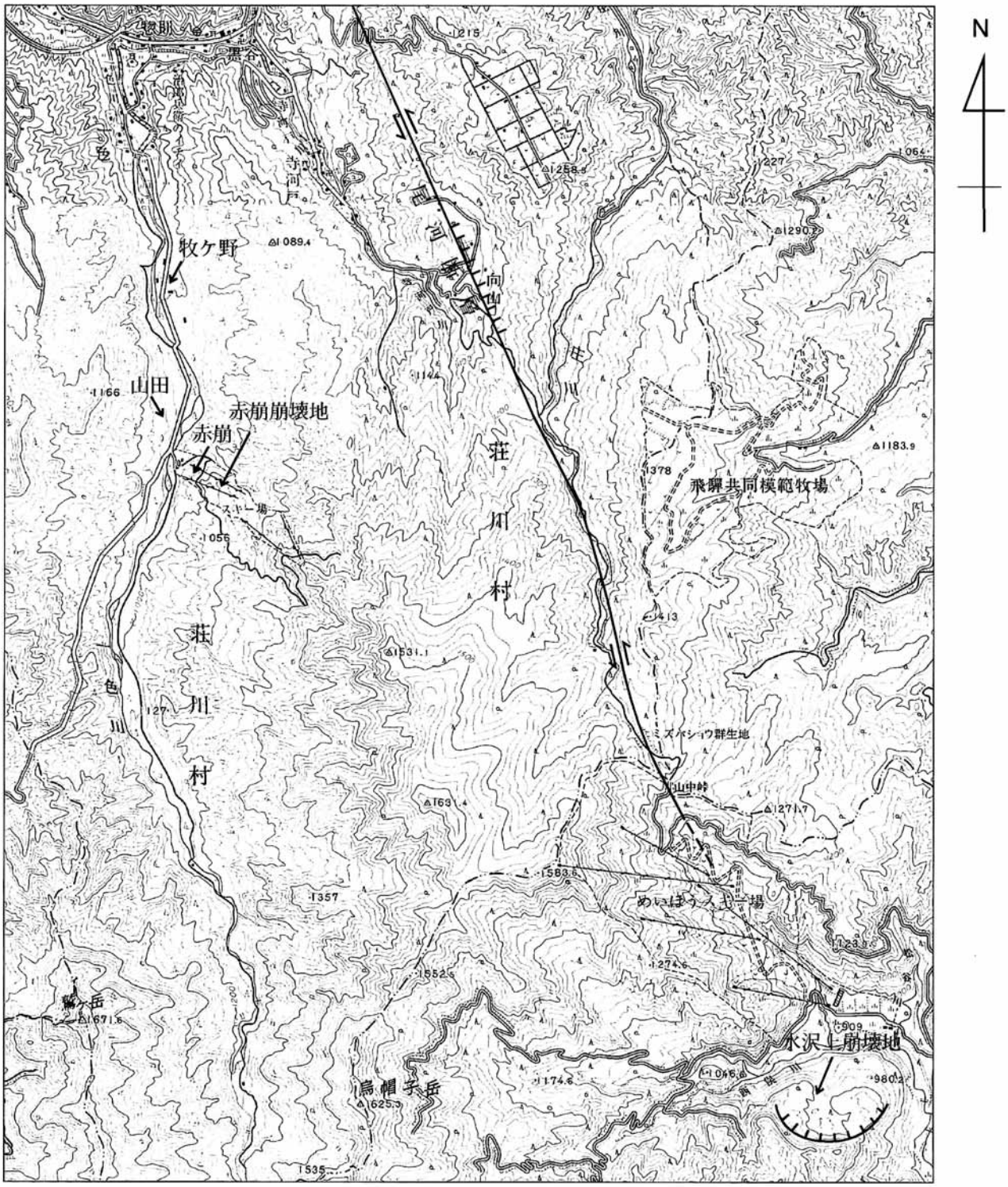


図1　天正地震（1586年）時の大規模山体崩壊

図２ 遊浄寺猿丸村由縁記

図４ 赤崩の一色国際スキー場

図５ 荘川村指定文化財 牧ヶ野道場跡

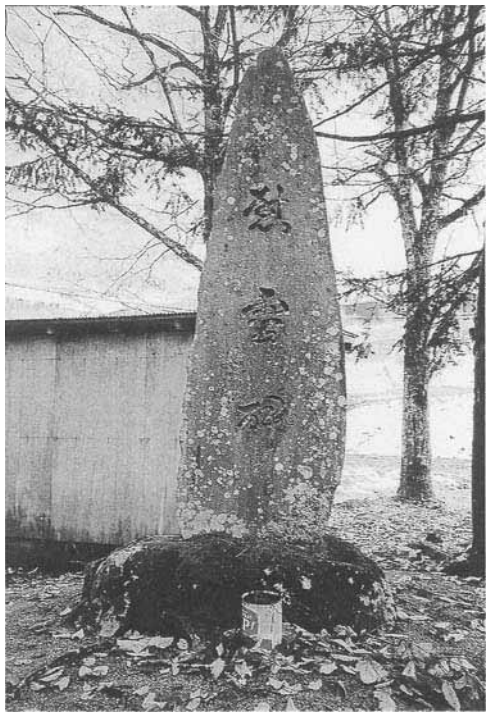
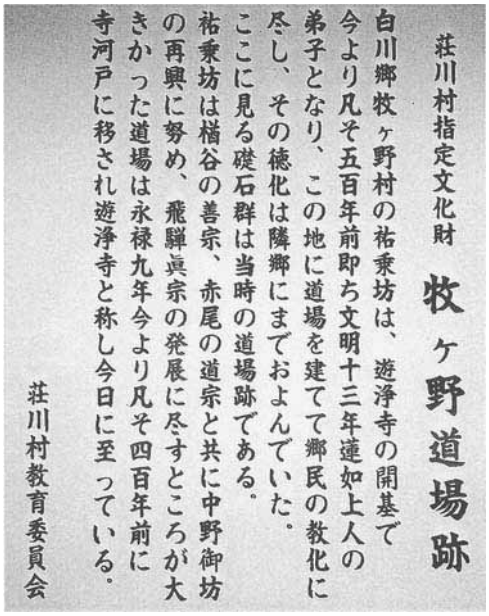


図３ 赤崩の慰霊碑



荘川村指定文化財

牧ヶ野道場跡

白川郷牧ヶ野村の祐秉坊は、遊浄寺の開基で今より凡そ五百年前即ち文明十三年蓮如上人の弟子となり、この地に道場を建てて郷民の教化に尽し、その徳化は隣郷にまでおよんでいた。

ここに見る礎石群は当時の道場跡である。

祐秉坊は楢谷の善宗、赤尾の道宗と共に中野御坊の再興に努め、飛騨真宗の発展に尽すところが大きかった道場は永禄九年今より凡そ四百年前に寺河戸に移され遊浄寺と称し今日に至っている。

荘川村教育委員会

図６ 図５の案内文